三英傑の足あとをたどって

Vol.2

織田信長初陣の地

問 市観光協会 ☎95-9894

織田信長“初陣”は碧南市

織田信長について書かれている「信長公記」には、天文16年（1547年）に、当時13歳の信長は初陣の地として三河の国大浜に押し寄せ、あちこちに放火したと記されています。

信長が碧南に攻めてきたというこの話は、碧南市の民話にも残っています。

信長初陣はなんと「大惨敗」だった？

碧南市の民話では、信長が攻めてくることを事前に知った、当時大浜を治めていた長田重元（おさだしげもと）は待ち伏せをして、なんと信長を追い返したというのです。身の危険を感じた信長は、民家や寺に火を放ち、退却したそうです。

このように、民話では信長を敗走させたとありますが、信長公記には初陣の勝敗についての記載はありません。加えて、当時の初陣というものは人生の大切な通過儀礼であり、親は子が必ず勝てる戦いをさせることが通例であったとされています。

信長初陣の勝敗の行方はどうだったのでしょうか？

民話にはまだ続きがあり、戦のあと、織田信長の兵士の亡骸（なきがら）がかなり残されていたため、長田重元はこれを哀れに思い、家来に亡骸を葬るように命じ、塚を作らせました。この塚が全部で十三あったことから、このあたりは十三塚（とみづか）（現：向陽町）と呼ばれるようになったそうです。

織田信長初陣の地伝承地 津島社

民話では、信長は、当時この地に建っていたとされる極楽寺に火を放ち退却したと言われています。

碧南の歴史へのいざない

問 文化財課内市史資料調査室 ☎41-4566

No.101 おいしいものづくし（6）
～新川の畑に実るもの～

江戸時代の終わり、嘉永（1848～）から明治（1868～）の始め頃にかけてこの地にも新しい野菜が次々と入ってきました。畑の広がっていた新川北部地域では自家用に作っていた茄子（なす）や大根に加え、新しく南瓜（かぼちゃ）や胡瓜（きゅうり）の栽培を始め、盛んに出荷するようになりました。特に南瓜は「松江（まつえ）かぼちゃ」として有名でした。

新川の松江には江戸時代から発達した港があり、「熊野（くまの）行き」といって、当時盛んだった瓦（かわら）・煉瓦（れんが）製造のための燃料（薪（まき））を熊野地方から運んできた船の帰（かえ）り荷（に）に、大量の大根を積み込んだということです。

また、大正3年（1914）には刈谷新駅と大浜港駅の間に三河鉄道が開通しました。これによっても新川の野菜が大量に出荷されたということです。

鉄道が知立、豊田へと延びる中、丸岡（新川北部）の久加園（きゅうかえん）農場では施設園芸に取り組み始めました。

はじめは10坪ほどの広さの建物に油障子（あぶらしょうじ）を張り、胡瓜や茄子の促成栽培（そくせいさいばい）をしました。大正末期（1925～26）にはガラス温室をつくり、メロン栽培も手がけました。東京、大阪に加え名古屋にも需要があり、鉄道の客車便（きゃくしゃびん）で送ったそうです。もちろん、高級食材のメロンは旅館や料亭からの注文でした。

戦時中、温室のガラスを土中に埋めて守り、戦後、胡瓜栽培を盛んにされたそうです。

（出典：『新川町誌』、碧南市農協発行『写真で綴る碧南農業　明日への伝承合併20周年記念写真集』（写真とも）、『碧南市史第二巻』）

△新川における温室メロンの栽培（大正14年）